

---

# ミルドタウン

akuhoshi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミルドタウン

### 【Nコード】

N7105Y

### 【作者名】

akuhoshi

### 【あらすじ】

記憶喪失者だけが住むことのできる街、ミルドタウン。

四年前、ミルドタウンにうつり住み、探偵となったミモリ。

西地区の倉庫街で少女とすれ違った次の朝、アパートの壁に赤いペンキでラクガキがみつかった。

『Where do your pains come from  
? DA』

その言葉の意味するところとは？

p i x i v と同時掲載です

種別を間違えたので再投稿しました。すみません

## ミルドタウン

1

夜の道に、月の光をきらきらと反射させる、ハーブキャンディの銀色の包み紙が、等間隔に、点々と落ちている。

ミルドタウン、南西部の倉庫街。

港から遠い奇数番の倉庫のほとんどは、使用されていないか、使途不明の荷物が運び込まれたままになっている。一万人弱の生活を支えるために必要な物資が少ないのか、それとも、誰かが使い途を忘れてしまったのだろう。しまいこまれたままの荷物だって、自分の使い途など、思い出そうとしても思いだせないはずだ。この街の住人たちと同じだ。

キャンディの道の端っこは僕の足もとに続いていた。「やあ、こんにちは」コートのポケットに手を突っこんだら、底にあいた穴から指がでた。ポケットの中で逆立ちをしている、口のあいたキャンディの大袋を、正しい位置に戻す。

それから落としたキャンディをひとつずつ拾いあげる。

まるでお菓子に誘われたヘンゼルとグレーテル。道しるべの白い小石よ、かわいそうなふたりを、あたたかいお家まで連れ帰ってくれ。

そのままにして帰るという選択肢に心ひかれたけれど、残念ながら倉庫街の掃除係とは顔見知りであるし、そもそもこんなまずいキャンディ（しかも大袋）のために、嗜好品用の交換券を差し出そう、というのは、世界じゅう探しても僕だけだろうから、いずれ僕が犯人だとわかってしまう。

それはとても気まずいことだ。

保安官のバルに呼び出された僕が、保安官事務所に呼び出されてしょぼくれているところを想像すると、凍った頬が笑みの形になった。

吐く息が白い。

ミルドタウンの冬はとても寒い。

それは、街の緯度の高さに関係している。あと、海の近さだ。最後のキャンディを拾い終えた頃、僕は帰りの路面電車の心配をしていた。時計回りの路線とちがい、反時計回りは気が短い。

電車が僕を置いて出発してしまわないうちに、さあ、行こう。その場に背をむけると、腰のあたりに何かが軽くぶつかった。

「ごめんなさい」

小さな女の子だった。

「大丈夫？」

彼女は僕の顔を見ると、とても驚いたような表情をした。

アジア系の顔立ち。つぶらな瞳よりも、ピンク色のセーターと、サンダルという、ちぐはぐな格好が印象的だ。

「待って、お菓子をあげよう」と、咄嗟に声をかける。「キャンディをあげるよ」

彼女の小さな手を握り、銀色の包みを手渡す。

その声かけがかえって不審がらせてしまったようだ。彼女は顔を覚える前に、僕を突き飛ばすように、走り去って行ってしまった。

街のほうにはまだ明かりがあった。彼女はその明かりの先に消えた。

周囲をきちんと確かめたが、彼女の保護者となるような人の姿は、どこにもないし、気配も感じられなかった。

追いかけるべきだと思った。思ったけれど、やめた。

正確には、やめておいた方がいい気がした。

こういうときは、勘にしたがう。僕は探偵だが、推理よりも、勘のほうが優秀な探偵だ。それに、運動音痴だから、追いつかないだろう。

彼女のことは保留にして、反時計回りの路面電車乗り場に急いだ。

ミルドタウンは周囲を海に囲まれた円形の街だ。

住民の数は、公式には十万とされているが、通りを歩く人の量や、空きアパートの数を考えると、一万人に達していないのではないか、というのが本音のところだ。

ここは、東アジアを主な舞台とする泥沼の戦争や、世界的な不況など、憂鬱なニュースから逃れるために、金持ちたちによってつくられた閉鎖型コミュニケーションとは少し毛色が違っている。

街の人たちは、ずっとこの街で暮らしている。

外の世界を知らないせいか、変わりものが多い。

外の世界に興味がないから、本だって、あまり読まない。

港はあるものの、船をみたことがない。

ミルドタウンの外部とのやりとりは、海上の中継ポイントを介して行われるからだ。

この街に移り住んだとき、僕はしわひとつない、ぴんとしたシャツと、すてきな茶のジャケットを着た、どちらかというと温室育ちの十四歳だった。

なによりも、僕はハーブキャンディが好きだった。

この街で、ハーブキャンディを手に入れるには、ちよつと骨が折れる。

ミルドタウンでは、交換券とよばれる代替通貨を採用している。

食料や日用品は、ごく当たり前に支給される通常の交換券で事足りるのだが、キャンディは嗜好品用の交換券を使わなければならず、しかもそれは、年間の絶対量が決まっていて、追加で買うことは認められていない。

そんなわけで、この世間しらずな少年は仕事を必要としていたのだ。

町役場でそれを斡旋してもらったとき、《探偵》という職業があることに僕はとても驚いたし、感謝もした。探偵に年齢は関係ないし、それに街の住民は価値のある個人的な資産を持たないので、報酬はたいてい嗜好品の交換券で支払われることになった。

僕はハーブキャンディと引き換えに探偵になった。

まあ、それは冗談だけれど、事実としてはそういうことになる。

僕はやむを得ず探偵になり、そして、普通の住民よりもたくさんのハーブキャンディを手に入れることができる。

僕はマグカップにコーヒーの粉末を入れ、ストーブ（備えつけのもの）からやかんを下ろし、注いでスプーンで混ぜ、さらに湯を足して、コーヒーを作った。

仕事をはじめてからずっと暮らしているアパートは、街の西側にあった。

架線沿いにあるこの建物は古くて、あまり手入れも行き届かず、路面電車が通るたびに、外側に取りつけられた非常階段が危なっかしい悲鳴を上げている。

他の場所をみつけて、引越さないでいるのは、部屋の本棚に詰め込まれた本の量が知らない内に致命的な量になってしまっていて、全部を移動させるのが大変そうだからだ。家具と家電だけなら、少し大きな旅行鞆を用意するだけで、僕はどこにでも行けそうなのだけれど。

キッチンには、郵便屋がついでに届けてくれた僕あての手紙が広げている。

この街の郵便屋は、どちらかというと何でも屋の運送業、といった趣で、バイクで運べるあまり重たくないものはだいたいなんでも運んでくる。

そして探偵に手紙を届けるのが、彼の何よりの誇りのようでもある。いつも胸をはって、手紙には染みひとつつけていないこと、それから仕事があれば、お気軽に、またいつでもどうぞ、代金はサービスですと伝えてくれる。



それから、今日の届け主はきつと恥ずかしがり屋のあなたのファンに違いありません、とつけ足してウィンクするのを忘れない。ようするに手紙は事務所のドアのすきまから滑りこませるか何かして、直接届けられ、送り主は匿名で、朝一番に僕のところまで届けにきた、ということである。そういうふうに依頼が届くことは、じつは少なくない。

あの気のいい青年が、「探偵に手紙を届ける郵便屋」という自分の役割を演じるのに夢中で、手紙や依頼の内容をせんさくしたりしない、ということは、街のみんなが知っているのだ。

今日の手紙には、ふるえた筆致で、ただひと言、こう書かれていた。

『Who are you?』

たどたどしい言葉の連なりが、僕に昨日の女の子を思い出させた。ピンク色のセーターから突き出た手足は、この文字のようにか細かった。

僕は誰？

それはとても答えにくい質問だ。

だから、わかりやすいところからはじめよう。

四年前、僕はこの街に来た。探偵をしている。名前はミモリ。

住んでいるアパートは街の西側にあり、東側にはない。

好きなものはハーブキャンディ。朝食にはコーヒーをのみ、ビスケットを二枚食べる。今日は、目玉焼きをつけてもいい気分だ。フライパンを探していると、部屋の外から話し声が聴こえてくることに気がついた。

僕の部屋は、非常階段にちかい角部屋だ。

住民がわざわざ僕の部屋の前で立ち話をするっていうのは、めずらしい。

マグカップと、ビスケットを崩れないようにそっと持ち、ドアのキイを外して押し開ける。

しん、と話し声が静かになった。

ドアの外に、たぶん、アパートの住人たちがあつまっていた。ほとんど全員じゃないだろうか。

気のせいではなければ、みんな、同情的な瞳をこちらに向けている。彼らが集まっていたのは、正確には、扉の横。壁の前だった。

「やられたね、ミモリ。たちの悪いいたずらだ」

と、集まったうちのひとりが言い、僕の肩を叩いてきた。

部屋から出て、みんなの横に並び、自分の部屋の扉の横の壁をながめた。

『Where do your pains come from  
? DA』

赤いペンキでべつとりと、そう書かれている。

ためしに触ってみたが、ペンキは乾いていた。

「どういう意味だい？」

と、先ほどの彼が気の毒そうに声をかけてくる。

僕は首を横にふり、お決まりの文句を口にした。

「さあ、覚えていない」

それは冗談でもあり、いろんな物事を納得するに足りる唯一の説明でもあったので、住人たちは納得して、三々五々、自宅へ、職場へと去って行った。

ここはミルドタウンだ。

街の人たちは、少し変わりものが多い。

本はあまり読まない。

船をみたことがない。

そして、みんな記憶喪失者だ。

ミルドタウンの主な交通機関は、路面電車だ。僕もこれをよく利用する。渋い緑色のふたり掛けの席にひとりで座るとき、とても懐かしい気持ちになる。

街はとてもきれいに整理されており、工場や倉庫街は西側に集まっている。工場は無人化されたシステムで管理されていて、実際に働く人間はわずかで良い。それ以外の、住民たちが住んでいる東側それから町役場など公の施設がある南側は、欧州の街並という街並を平均化して、それをまねたような案配だ。結果として、空の色と相まってどこもかしこも灰色で特徴のない街並、という出来栄えとなっている。散歩中に迷子になることがよくある。

時計まわりの路線は、街の中央にあるセントルム病院の前から伸びる道で途切れている。西側に行く人たちは少ないし、北側は森と山なので、もっと少ないためだ。

運賃をお決まりの代替通貨で支払い、ステップをおりてから、目的のコーヒーショップまで十分くらい歩く必要があった。

湿ったアスファルトの上を歩くのは、悪い気はしない。とくに道路の真ん中を歩いていても怒られないシチュエーションの散歩は大歓迎だ。この街で車をもっている人は少ない。バスの本数も少ない。そうそう轢かれないだろう。

角の洋品店を目印に路地を曲がると「SEVENTH」の看板がみえた。

セブンスは、雑居ビルの一階にへばりつくようにして存在するコーヒーショップだ。兎の寝床のような店内に、カウンターぎわの丸椅子が六つ、路面側にふたつ、テーブル席がある。硝子窓はいつも

曇っていて、コーヒーカップの白いソーサの三つに二つは罅割れが入っている。

マスターは頭にバンダナを巻いた髭を生やした中年の男の人だ。どんなにドアベルを派手にならして店に入っただとしても、このマスターはまちがいにカウンスターの脇に置いた小さなテレビをみているか、それともラジオをきいている。今日は、テレビの定期ニュースをながめていた。

「……昨日未明、中央病院で火事があり死傷者が多数でた模様……放火の疑いもあるとみて、市民に注意をうながしています……」

そのような原稿を、男性アナウンサーの合成音声を読みあげた。

「大事件だね」と声をかけると、マスターは重々しく頷いた。

店には先客がいた。

どちらも常連客だが、テーブル席にふたりいて、カウンター席についた白金の髪の少年と何ごとか話している。話しているというか、口喧嘩に近い。

「注文は？」とマスター。

僕はポケットから、クリップ（書類用のやつ）でとめた交換券の束を取り出し、二枚、カウンターに置いた。

「コーヒーを。一枚は、ギーのぶん」

「あんな大ばら吹きに奢ってやることないさ」

すると、それを聞きつけた客が、こちらを睨みつけた。少年のほうだ。

名前はギー。僕は彼のことをよく知っている。

「誰が大ばら吹きだった？ よけいなことをいうな」

「だって、お前、そんな小さななりじゃあな……誰も信じやしないさ」

ギーは、手や足や体のつくりがほっそりとしていて、とくにその白金の髪はまるで絹糸のようだし、指先と横顔はモデルみたいだ。何よりも、彼は僕と同一年だった。

「ふざけるな。俺は本当に軍属だったんだぞ」

テーブル席の客が苦笑いを浮かべた。

マスターはカウンターの内側でにやにや笑いを浮かべている。

ギーは一年前にこの街にきた。新しい住人だ。

この街に來ると外の記録には許可が無い限りあまり触れられなくなるから、確かめようがないのだが、彼はミルドタウンの外にいたときは軍人だった。

長びいた戦争は、世界から一定の年齢の若者の人口をうばい、結果として少年兵は一般的なものとなっている。

だが、セブンスの客たちはそんなことは知ったこっちゃないし、暇つぶしを探しているの、ぱっと見喧嘩の弱そうなギーはいつも標的になる。

「僕は戦争に行ったことがないけど、ギーの話はほんとうだと思っ  
よ」

「ミモリ」と、ギーが苦虫をかみ潰したような顔する。

客たちは僕をみて、あわれむような、変な顔を浮かべた。

僕は、無視して続けた。

「サイバネティクスを応用した自由変形素材や、自律型可変式武器が開発されて、前線の兵士の負担は僕たちが思うよりもずっと減ったんだ。たとえば子どもでも、知識さえあれば、十分な仕事をさせることができるんだ」

「もうやめろよ、変に思われるぜ」

「構わないよ」

ギーは「やれやれ、まったく」というようなスラングを口にして溜息を吐いた。

僕は、余計なことを言ったことに気がつき、恥ずかしくなった。

一年前はまだギーも本気だったかもしれないが、近頃では、観察していると、子供をあやすような、彼なりの諦めの感情が含まれていることがわかる。それが住人たちのコミュニケーションなのだと、段々わかってきたのだ。それと、住民たちがギーをなかなか認めようとしなのは、軍属だったかどうかということの真偽ではなく、

ギーに染みついている外の世界の空気のせいだということも。

店主はうすいコーヒーを二杯もってきた。

ギーはそれに遠慮なく口をつけた。

「みんな、きみがうらやましいんだ」

「いいね、いいジョークだ」

ギーが笑ってくれたので、僕はほっとした。

彼がミルドタウンを離れば、僕は寂しいだろう。

「おはよう、ギー」

「おはよう、相棒」

「さっそくだけど、相談したいことがあるんだ、いろいろと」

ギーは申し訳なさそうな顔をした。

「そのつもりだったなら本当に悪いんだけど、今日は先約があるんだ。夜に話を聞くよ」

うながされて窓の外に目をやった。革製のジャンパーを着た大柄な男が、そこに立って煙草をふかしていた。

「仕方がないね」

「本当に、話を聞くよ、ミモリ」

「ああ、うん……」

「だから、その話は取っておいてくれ」

僕が曖昧に頷き、彼が大男と行ってしまうと、客たちは納得できない、という表情をそれぞれの顔に浮かべた。

\*

セブンスの外に、煙草の吸殻が落ちていた。クラクションが鳴り、ふり返ると赤いランプをくつつけた保安官事務所の車がとまっていた。窓があき、保安官のバルガドが片手を大きく上げて合図を示してきた。

「ふられたのかい」と、大きな声で言う。

「残念ながら……」

「ギーを連れてったあいつは西ブロックのちんぴらだ。付き合っにはあまりよろしくない手合いだな。まあ、ギーのことだ、うまくやるだろう」

僕も、ギーのことは心配していない。僕が探偵であるように、ギ―もまた彼なりの仕事をする。機械いじりが好きらしく、そういう仕事がしたいと言っていたが、いまは頼まれれば何でもやっているようだ。彼を頼ってくるのは、どちらかというと、街のつまはじきものが多かった。

「保安官、病院で火事があったって聞きましたけど」  
バルはめずらしく疲れた表情を浮かべた。

「ああ、昨日は消火活動の手伝い、今日の午後からは関係者に話を聞きにいかなくちゃならん。おまけに、西ブロックで死体が見つかった」

「死体？ 物騒ですね」

「気になるなら保安官事務所にいってくれ。リドが相手をする」

「ありがとうございます。ちょうど、寄って行こうと思っていたんです。必ず行きます」

これから病院に行くというバルと別れ、僕は保安官事務所へと足を向けた。

事務所に併設された遺体安置室は、ひんやりと冷たい空気が流れている気がした。保安官補佐のリドが冷蔵庫に安置した夫婦の遺体を引き出して、覆いを外して見せてくれた。

「亡くなったのはアモとミサだ。西ブロックの集合住宅に住んでいた夫婦だよ。アモは工場勤務、ミサは娘ができてから雑貨店の仕事をやめている。ふたりとも昨日の九時ごろ、自宅の非常階段下で死んでいるのを発見されたんだ」

傷はひどいものだったが、表情は不思議と静かだった。

夫婦にはほかに身よりがないので、遺体は運ばれて火葬にされる。親しい友人が、それとも仕事場の同僚たちが見送ってくれるかもしれない。

「僕もわりと近くにいたのに、さわぎに気がつかなかったな」

「いや、さわぎにはならなかったよ、あまり人気のない区画だから」「自殺ですか」

訊ねると、リドは神妙な顔つきで頷いた。

「死亡推定時刻は見つかった時刻の一時間くらい前だろう。とくに遺書らしいものはみつかっていない。それから、ふたりの体内から睡眠薬を検出した」

「処方箋は……」

「ケントルム中央病院のものだ。ミサに処方されたものだが、常日頃から、アモもそれを拝借して服用していたらしい」

「遺品を拝見しても？」

「構わないよ、こっちに来てくれ」

リドはひと抱えくらいの段ボール箱をひとつ、僕の前に差し出した。



段ボールの箱の中には、発見時、アモとミサが身につけていた衣服や、時計なんかが几帳面におさめられている。その上にのせられた三冊の日記帳が目に入った。

これらは自宅からバルとリドが持ち出したものだろうか。

どこかに電話をかけていたリドが戻ってきて、とくにこちらには注意を払わず、自分の机に座った。

彼の机の上にま新しい写真立てが飾られているのが目に入った。

無意識のうちにリドがそちらに目をやったせいだ。

二スを塗った木枠の中で、明るい髪色の、笑い笑窪のかわいらしい女性がカメラに向かってポーズをとっていた。

しかし写真の画質は粗く、人物のポートレートにしては中途半端に切りとられていて、注意深くみればそれが雑誌の切り抜きであることはすぐにわかる。

「リドの奥さん？」

質問に悪意はなかった。リドは肩を竦め、写真立てを伏せた。

「似てるっただけでね、意味はないんだ」

「わかるよ」

「本当さ」

僕は頷いた。リドの鳶色の瞳にじんわりと、あわい感情が滲んだ。僕は、いつもそれをうまく読みとることができないでいる。悲しみだろうか。それとも、なくしたもののために傷ついた自分をいたわるための優しさだろうか。

「ところで、日記が三冊あるみたいだね」

「ああ、夫婦には娘がいたんだ。実子だよ」

「へえ……」

ミルドタウンでは養子縁組が奨励されている。またその特殊な環境から実子を望む人は少ない。不可能ではないが、珍しいケースだ。「ところで、その娘さんって、いま、どこに？」

「それが、事件の後、どこかに消えてしまったんだ。たぶん、シヨックで逃げ出したんだろうね。なに、きつとすぐにみつかると思う

よ  
」

日記の表紙に、ジュリ、と書かれている。

ジュリ。それがアモとミサの娘の名まえだ。頭の中のメモ帳に太字で書き込んで、アンダーラインを引いておく。

僕は好奇心から、彼女の日記帳を開いてみた。

内容は当たり障りのないものだが、最後の数ページが乱暴にやぶり取られていた。

ふと思い立って、これはやはり勘というしかないが、今朝方とどいた手紙をその破り目に当てがってみた。すると、ふたつはぴったりと一致して、それがかつてはひとつだったものだと言張っていた。

保安官事務所を出たあと、僕はケントルム中央病院に寄ってみることにした。

探偵という仕事のためではなく、病院に用事があったのだが、どうしても気分が乗らずにひと月ほど後回しにしていた、火事のニュースをみたときに、そういえば、と思い立った次第だ。僕は真面目ではないので、頼まれもしない仕事をしようという、お節介と紙一重の殊勝な心がけはもたない。

ケントルム中央病院は、ちょうど円の形にある街の、名の通り中央にあり、緩やかな丘の頂きに建物がある。

病院は市民が利用する外来と、長期入院患者のための医療施設とに分かれている。

ミルドタウンの住民にとっては、病院はなくてはならないものだというか、定期的に訪れなくてはならないもの、という決まり事がある。そして日記を提出しなければならない。拒否すると、ミルドタウンに住む資格を失う可能性がある。日記を書くことは市民に課せられた義務なのだ。

義務や制約はミルドタウンのようなコミュニティでは珍しくないといえ、それらのほとんどは、この街の特殊な環境に起因したものだ。

すなわち、市民が皆、何らかの記憶喪失者であるという、それだ。これは言葉通りの意味だ。ミルドタウンという街には、記憶喪失者しか住むことが許されていない。例外は無い。たとえ一部分でも、全体でも、ほんの一瞬でも、長い時間のことで、みんな、何かしらを忘れて生きている。保安官のバルガドやリド、それからセブンスのマスター、ギー。

僕の知っている範囲では、ギーの記憶は、まな板の上で刻まれた野菜のようにずたずただ。戦役についていた際、有毒ガスを吸い込んで、目覚めたときには既にそうだったという。

リドも、ほとんどのところはちゃんとしているのだが、婚約者の顔だけが思いだせないのも、いつも彼女の影を追っている。僕の推測だが、彼は脱落した記憶に婚約者の存在を感じるといつているだけで、それが実在の人物だったかどうかは怪しいのではないかと思っている。

僕もまた、ミルドタウンに來た四年前からの記憶しか、持っていないかった。

生れてから十四年間ほどの記憶は脳の中からそっくり姿を消している。

僕は自分が誰なのか、本当の意味では知らないのだ。

自分で調べようと思っても、ミルドタウンという環境はそれを許さなかった。

だけど、忘れている、それだけで済んでいる僕たちはまだ良いほうだった。

戦争や貧困から逃れ、ミルドタウンを訪れるために、怪しい薬剤や手術のせいで廃人となってしまうたり、生活記憶まで失って、ケントルムの長期入院施設で専門の看護婦つききりの介護を受けながら、赤ん坊から人生をやり直さなければならなくなった人たちだ。って珍しくない。

このような特殊な事情をもつ人々を一か所に集めたのは、慈善事業を建前とした、何かの実験だったのだろうと思う。中央病院を運営するケントルム財団がミルドタウンの重要なスポンサーであることから、それは明らかだ。だが、実験が現在まで続いているかどうかは疑問だ。

火事があったという話だったけれど、病院は想像していたよりも静かだった。正面にある一番大きな棟は無傷に見える。とはいえ、午前の診療は急患以外は休みになっているし、後片付けがあるのか、

どことなく慌ただしい気配が感じられた。

受付で来院を告げると、すぐに一階の奥にあるクレアの診察室に呼ばれた。

クレアはケントルムで働く精神科医だ。

彼女の診察室は窓が大きくとつてあり、よく手入れされた明るい森が見わたせる気もちの良い部屋で、僕も気に入っている。それなのにあまり頻繁に訪れる気がしないのは、ここが病院だからだろう。それに、彼女は僕たちとは違う。

彼女の過去は、彼女のきちんとした頭のなかに整理整頓されて、収納され、いつでも望んだときに取りだすことができた。

クレアのすりりとした体はデスクの前に、カルテを手に立っていた。

「日記の提出が遅れているわね、ミモリ。一日に一度日記を書き、市政府に提出するのはミルドタウン市民の義務よ」

「ごめんよ、クレア。いろいろあって」

僕は丸椅子に腰かけた。

「いろいろって何よ」

クレアは形の良い細い眉を歪めて、不機嫌そうな表情を浮かべた。彼女は自分の仕事が蔑ろにされることを、他の何よりも嫌っている。でも、僕を筆頭に、カウンセリングが嫌いな患者は増えこそすれ少なくならなかった。

「それより、昨日火事があったんだってね」

クレアはため息を吐いて、話題を無理矢理変えたことを許してくれた。

「そうよ。おかげでうちは今忙しいのよ……死人だって出たんだし」「それは大変だ」

「一部の入院患者がパニックを起こしたの。不幸な事故だったわ」「放火犯は見つかった？」

「まだよ……あら？ 私、放火だと話したかしら？」

僕はにこりと微笑んだ。クレアも唇をにこりとさせ、足を組み替

えた。

僕は彼女との関係を友人どうしであると認識している。そして探偵としての僕と彼女は、四年前からずっと、良好な共犯関係にあるといえる。もちろん医師である彼女と、患者である僕というのも、その側面として常に存在していた。

「目的はなんだろう。火事が起きた建物には何があつたの？」

「火事が起きたのは奥にある旧館よ。今は診療ではなく病院の研究施設として使われているの。市民の個人記録の一部が扱われていて、それが盗まれ、さらに焼失した形跡があるの。つまり……あなたがこの街に来る前の経歴なんかもね」

「どこかにあるだろうなとは思ってたけど」

「もちろん秘密よ。でもいい機会だから、あなたの記録を見せましょうか？」

「え？」

「私はね、ケントルム病院の秘密体質には疑問なのよ。何かあつてからでは遅いわ。その前に誰かと少しでも情報を共有していたいの。もちろん、信頼できる人物よ。そしてここでは、それはとても少ない……あなたも、興味があるんでしょ」

「火事で燃えたんじゃ……」

「研究データはね」

クレアは意味ありげに微笑んだ。

病院の建物の裏側に、さらに奥に続いていく細く踏みならされた道らしきものがあり、先を歩くクレアに従ってついていくと、かすかに刺激臭が漂ってきた。

それはどんどん強くなっていく。

突然道が開けて、煉瓦造りの洋館が姿を現した。

一階の、向かって左側が焼けている。二階のテラスに付着した煤の様子を見ると、火はかなりの勢いでもって這いあがったのだろう。彼女はカード・キーは使わずに、手で両開きのドアを押して中に

入った。玄関からすでに、スプリンクラーがじゅうぶんな仕事をし  
たとみえ、ずぶ濡れだった。絨毯はもう、駄目になってしまっただ  
ろう。

クレアはエレベータで地下に向かった。

エレベータには階数を表示する装置はなかった。ただ地下に向か  
うためだけに設置されているものなのだ。感覚としては、五十メー  
ターは降りた気がする。シャフトが停止し、扉が開く。すっきりと  
した小部屋があり、また、扉があった。

そこはカード・キーではなく、指紋と虹彩の生体認証を用いて開  
くものだった。頑丈な鉄製の扉で、警備システムもちゃんと生きて  
いるみたいだった。多少の火事は想定されたケースだったのだろう。  
扉を開けると「さあ、はやく入って」とクレアが手振りで伝えて  
きた。

中に入り、扉を閉めると、それを感知して一斉に明かりがついた。  
そこに広がる風景を目にして、僕は啞然とした。高い天井と、コ  
ンクリートの床。広大な空間に、整然と棚が並んでいる。それぞれ  
の棚にラベルの貼られた箱がぎっしり詰まっている。

クレアが扉の傍にある操作盤に何かを入力して、いくつか設置さ  
れている端末を手についた。

「来て、こっちょ」

クレアが、果てのみえない地下空間を呆然と見渡していた僕に手  
招きをする。

「ここでは、市民が街に移住する前に所持していた物品で、ミルド  
タウンへの持ち込みが許可されず、どうしても処分できなかったも  
のが保管されてるの」

箱はどれも同じような、茶色い、味気ないケースで、名前など個  
人を示す記号は何ひとつ書かれていなかったが、棚に小さなランプ  
がついており、目的の箱の上でぴかぴかと光っていた。そしてその  
位置を、端末でモニターすることができるようだ。

クレアは棚からひと抱えほどの箱を取り出してくれた。

僕は箱をどこに置こうか迷ったが、とてもきれいで問題なく思えたので、床に置いて箱の蓋を開けてみることにした。

「普通は何が入ってるものなのかな」

「思い出の品や、高価な宝飾類、美術品や手紙なんかが多いわね」

「こういうものが残っているなら、たとえば、リドのために写真か何かを探してあげることだってできるんじゃないの？」

「個人的な興味で閲覧することはできないのよ」

「研究なら良くて？」

「そうね、研究のほうがいくらかマシだわ」

僕はミルドタウンに来たとき、品物を預けたことがあったか思いだそうと試みたが、その記憶がありそうなところには、濃い灰色の絵具が塗りたくられたようになっていて、どうしても読みとれなかった。

僕は呼吸を落ちつけて、目を閉じた。緊張は、思ったよりもしていない。そこにあるのは、ミルドタウンに四年生きているだけの僕という人間にとって、他人だ。

すてきなものだといいな、とだけ、少しだけ、思う。

すてきなもの。

ワインのコルク、お菓子の包み紙。

きれいな表紙の絵本。

写真のついた葉書。

おもちゃの車……。

そういった品々ならば、僕はずっと、僕のままでいられる。

けれど、箱の中には、ありとあらゆる予想を裏切って、ぎっしりとスクラップブックが詰め込まれていた。

スクラップブックには新聞記事や雑誌の切り抜き、それも殺人や誘拐などの、事件記事ばかりが集められていて、一分の隙も無く、それだけで埋め尽くされていた。

そこから感じられるのは、すさまじいまでの執着心、憎悪、あるいはただの好奇心……。



どれも、今の僕の中には存在しないものだった。

クレアに無理を言って、箱の中身をありったけの古雑誌と交換して来た。僕はスクラップブックをまずギーに見て貰いたいと思ったが、それが今日中にはできそうにないことも、うすうす察していた。こればかりは、僕の気もちの問題だ。

病院を出るとき、クレアは無理をしないように、と何度も忠告をした。大丈夫、と答える僕を、彼女は信じてくれただろうか。

ギーは西ブロックにある倉庫街の、未使用倉庫を寝床と決めている。

ミルドタウンでは、申請さえすれば誰でも無料で部屋を借りることが出来る。ミルドタウンには使われていない家やアパートが、そこらじゅうに転がっているのだ。

それでも、ギーは少ない荷物をもって浮浪者同然の生活をしている。

住民たちとの付き合いを嫌っているのだろうかとは、想像に難くない。

僕たちはバスの停留所で落ちあい、まずは食堂にボウルに入った麺料理を食べに行った。僕は自分の分を半分までしか食べられなかったが、トマト味の麺はなかなか美味しかった。

その帰りに、夜中まで開いているデリでしようがたつぷり入ったのホットティーを買い、彼のねぐらの前に放置された荷箱に腰かけて話をした。

海沿いのそこはとても冷える。

風が髪に重力を意識させ、頬に冷たく、ひりひりと貼りついてくるみたいだ。ギーは、兵士時代の副産物で、体の中に仕込みがあるらしく、高温と低温に耐性があり、真夏や真冬にとんでもない格好

で出歩いていることがよくあった。

荷箱の上には、ギーのほか、口の開いたキャンディの袋が広げられている。

ギーはそれをひと粒拾いあげると、顔をしかめ、「まあ、悪くない味だ」といつものお世辞を言った。

僕は昨日の夜から、今日の昼にかけての出来事を彼に話題として提供した。

今朝届いた手紙のことや、アパートの落書きやアモとミサの事件についてだ。

ギーは端正な顔を歪め、まずは不思議そうに呟いた。

「DA？」

僕はそれを聞くだけでうんざりとした。

「そう。まだ家の前にでかでかを書いてあるはずだから、見に来る？」

「ははは、そいつはいい。白いペンキを持って行くよ」

「たぶん、何かのいたずらだと思うんだけど。でも、一応、DAという署名のことについて調べようと思っているんだ。君は街に来る前の記憶があるから、知らないかと思って」

「どこかで聞いたことがあるな。待てよ……すぐに思いだせないかもしれない」

「構わないよ、わかったら知らせてほしい。セブンスに会いにいったときに」

それでもまじめに考えているギーの横顔をながめているうちに、僕はふいに、あることを聞いてみたい気持ちになった。そして素直にそうした。

「ギーはいつから戦場にいたの？」

長いこと、といつても、ほんの数ヶ月間ほど。

彼と出会ったときから気になっていて、いつか聞いてみようと思っていたことだった。

「なんだよ、いきなり。十三のときからずっとだよ」

「ごめん、嫌な話だったね」

「いいや。じつを言うと、いつかミモリとこの話になるんじゃないかって、待っていたところもあるんだ」

ギーは照れ臭そうに鼻の頭をちよつとだけ掻いた。

「ミモリの言う通りさ。外の世界は戦争ばかりで少年兵は普通だった。俺なんか学校を出してもらえただけまだよかったんだ」

「どうしてミルドタウンに来たの？」

「本当は戻ろうと思ってたよ。でも、そうになると、死ぬまで兵隊暮らしだっただろうな。仲間がコーディネーターと話をつけて、手続きをしてくれて、結局、ここに来たのは運がよかったって思ってる。まるで天国みたいなところさ」

「こんなこと言うべきじゃないってわかってるけど、僕は君がうらやましい。僕は自分が何ものかってことすら思い出せないんだ」

「ミモリはミモリさ」

ギーが同意を誘うように笑っている。

僕はうまく答えられなかったし、笑顔もぎこちなかった。

ギーは「間違いない」と短く言って、無視するわけではない、という合図に僕の手の平を二回、軽く叩いて、僕から視線を外した。

僕は問題を抱えている。それがはつきりとよくわかった。

反時計回りの路線の路面電車乗り場まで、ギーは送っていった。僕が送っていった。

道の先から、闇を切り裂いて近づいてくるライトがみえた。

「本当は、今日は君に提案をしようと思っていたんだ」

「なんだよ、何か問題でもあるのか？　してくれよ、ミモリ」

「ありがとう。でも、またにするよ」

僕はギーの目をみてそう言った。

ギーと一緒にこの地区にある生活用品を取り扱う雑貨店を訪ねた。住民が住んでいるのは、ほとんどが東側の地区だが、西ブロックには工場があるので、そこで働く工員のための住宅が用意されている。でも空家の多さは東ブロックの比ではない。昼間でもゴーストタウンのようだ。

それだけでなくとも空模様が悪い。ミルドタウンに灰色のふたをした雲は、いまにもふりだしそうな微妙な緊張を保っていた。

そこは昨日、遺体となっていた夫婦のうち、ミサが働いていた商店だった。

バルガドに連絡を入れ、アモとミサの身边を個人的に調べたいと申し入れると、バルは渋ったが、僕にはその権利がある。結局、ひとりではなく、ギーと一緒に行動することを条件に、あっさりと許可された。

保安官たちは昨日の火事の件にかかりきりのようだった。そういえば、昨日、地下倉庫に行くまで、病院のスタッフにすれ違わなかったのはバルが来ていたからかもしれないと、後から気がついた。僕の家が届いた手紙のことはまだ伏せておいた。伝えるにしても、だいたいどういうことなのか把握してから伝えたかった。

ミサのかつての職場は、食品から生活用品まで幅広く扱う小さな個人商店だ。

店主は恰幅のいい女性で、赤いエプロンをつけていた。

僕が名乗ると、彼女は忙しそうに、棚の同じところに置いてある同じ缶詰をカウンターに下ろしたり、それをタオルで拭いて元の場合に入れたりといった動作をくり返しはじめた。

ギーは店の外で待っている。退屈そうな背中が、埃のへばりつい

た硝子窓越しに見えた。

「そりやもちろん事件のことなら聞いてるわ」

「自殺の原因について、ご存知では？」

「自殺する原因？ 心当たりないね。だって、ここはミルドタウンよ。いつそ働かなくても、生活は保障されてるもの。工場でも作れるんだし」

それは、彼女の言うとおりだった。市民の生活は、交換券と呼ばれるミルドタウン専用の代替通貨によって行われる。交換券の発給はそれを受け取る市民の職業によって変動するものの、定期的に発行される基本のもので、飢えて死ぬということはない。職業をもつ人々は、通貨を得るため、というより、自分の満足のためにそうしている、というほうが圧倒的に多い。

「夫妻には子供がいたそうですね。事件の後で見かけませんでしたか？」

「子ども？ さあ……でも、すれ違っていたとしてもわからないわよ。子供なんかに注意は払わないし、それに、ミサは店に子供を連れてきたことは一度もなかったわ」

「連れてこなかった？ 本当に、ただの一度も？」

「そうよ。連れて来られても困るけどね。だいたい、本人たちは子供はいらないって言ってたのよ。だけど旦那のほうが上司の……なんていったつけ、たしかシモンってやつに薦められたか何かで、その気になったみたい。まあね、体外受精、出産で母体には負担はないわけだから、暇つぶしには丁度いいかもしれないわね」

僕はどうも、とだけ言って、店を出た。

ギーは手の平の中で白い四角いルービックキューブをもてあそんでいた。

彼がもっているのは、本当に、切れ目がつつすらとみえるが、色分けはまったくされていない、光沢のある純白のキューブだった。

ギーは僕をみた。僕は首を横にふった。手がかりはなし、という意味だ。

アモとミサの自宅は、ここから十分もかからない場所にある。そ  
ちに行ってみよう、と話しあい、歩きだす。ギーは天氣を気にし  
たようだった。

先にアパートの非常階段に回ってみることにした。

非常階段は、灰色がかつた緑色の建物の横手にへばりつくように  
して、あつた。

アモとミサが倒れていたであろう場所には、リドのチョークのあと  
がある。そこはアパートと隣の建物の狭い空間で、空調の室外機や、  
乗り捨てられた錆びた自転車のとなりに、塵箱が並んでいた。

正面に回り、黒い扉をあけて、中に入った。郵便受けの類は見当  
たらぬ。正面に階段、枯れた観葉植物の鉢が置かれており、管理  
入室の窓は板が打ちつけられていた。とても冷たく凍えた空間だっ  
た。

「ふたり一緒につて、やはり妙じゃないか」

と、ギーが言った。「妙つて、何が？」僕はコートに汚れがつか  
ないよう、氣をつけながら、後をついて階段を昇って行く。階段に  
は埃や泥がこびりつき、ほうり捨てられたごみもそのままになつて  
いた。こんなところを歩いたら、靴を新調しても台無しだろうに。

階段は急で、人がふたりすれ違ふ広さもない。壁が崩れて配管が  
剥き出しになっていたり、廊下の明かりはところどころ切れていた。  
「自殺をするつもりなら、俺なら、どっちかは素面にするよ。死に  
損ねたら大変だ」

「僕も妙なところをみつけたよ」

「何だ？」

「急な階段や暗い廊下、とても子育てをしようつていう夫婦の住ま  
いには見えない。アパートの賃貸料は、無料だ。引っ越そうと思え  
ば、いつでも引っ越せるのに」

「たしかに」

夫妻の住まいは最上階の一室だった。鍵を開け、まずギーが中に

入って室内を調べる。扉をあける、ということに、ギーはとても敏感だ。ドアを開けた瞬間に、爆弾が作動して吹き飛ばされる、という経験が多すぎたのだ。僕も探偵をはじめてからというもの、似たような状況に何度か遭ったことがある。

「入っていいぞ」

おそろおそろ室内を覗く。

寒々として、物の少ない部屋だった。入ってすぐが居間で、右手がキッチンになっている。窓が無いからか、薄暗く気づまりな部屋だ。左手にソファ、三人掛け、テレビ。雑誌や本は、左側の壁際に置かれた本棚にひとまとめにされているが、棚はあまり埋まっていない。あいている棚に、きちんと血の通った夫妻の写真が飾られていた。

それから、壁に、鮮やかなタペストリーがかけてあった。

それが唯一とっていい装飾品だ。

「中はまだましだな」と、ギー。

僕は首を横にふった。

「そうかな」

「？」

「このあたりに、家族写真の一枚くらいあってもよかったね」

白いむきだしの壁を示す。

「絵本やおもちゃや、ぬいぐるみ……それに、この部屋には、アモとミサがどんな人たちだったのか、それを感じさせるものがひとつもない」

僕たちは寝室や家のすみずみまで見て回った。すると、居間の棚と壁のあいだがぴったりと重なっていないことに気がついた。ギーと協力し、棚を動かした。

棚をどけたところにも、布がかかっている。ギーは手を伸ばして、赤と青の複雑に混じった壁掛けを外した。

すると、明らかに材質の違う、木製のドアが現れた。

「隠し扉だ。外側から鍵がかかるようになってるな」



錠を外し、扉を開けると、夫婦の寝室とは別に、小部屋があった。隣部屋と繋がる壁を無理矢理くり抜いて、隣の部屋の寝室と繋げているらしい。扉があったと思しき箇所はセメントで固められている。隠し部屋の中には、本棚がびっしりと並んでいた。それから、天井に、メモやゴシップ記事や似顔絵が大量に貼り付けられている。床にすり切れた毛布と汚いくまのぬいぐるみが転がっていた。

その部屋に一步踏み込んだとたん、自分の意識をどこか遠いところに連れ去っていく、その強い引力を感じた。

僕は嵐の中にいた。膨大な光と音と、イメージの大氾濫の中に。大音響はたわんで、言葉は意味をなさず、ただの無数の記憶の塊となって、存在している。そんな嵐が起きると、僕は忘れていた記憶の中から、もともいやなものを引っ張り出してきてしまう。そう、僕は、ここではない場所にいる。

田舎の一軒家がみえる。

隣家を見つけるまで、何キロも車を走らせなければならぬような、そういうただっ広いだけの田舎によくある家だ。

背の高い葦に覆われたクリーム色の壁。手入れなどされているはずもない庭に、壊れた電化製品が置き去りにされている。もう、誰も使わなくなった、汚らしいボールが、雑草と泥の中に隠れている。窓という窓にかけられた安っぽいカーテンは、埃にまみれ、鮮やかさを失って、佇んでいるのだ。

家の中もひどいものだ。キッチンにはありったけの洗っていない食器や鍋が積まれ、何もかも油で汚れている。テーブルにはピザや冷凍食品の食べ残しや、酒の瓶が山のようになっている。

がらくたのあふれた居間で、幼い男の子がテレビを見ている。

優しい茶色の、やわらかそうな髪の毛をした坊や。

テレビの光が、ちかちかと坊やの顔を照らしている。

『Who are you?』

坊やが不意に立ちあがり、裏口へ歩いて行く。

背の高い葦をかきわけていくと小さな池に出る。

池のふちにぼろぼろのボートが、やっとのことで浮かんでいる。

『Where do your pains come from  
? DA』

坊やはボートの中を覗きみる。

ボートの中には先客がある。

愛らしい女の子。顔も手も足もこんなに小さくて、その三つ編みも、ワンピースも、その体内からあふれだしてきた体液で、どろどろに、真っ赤に染まっている。

そこにあるのは血みどろの女の子の死体だった。

x x x

「DNA鑑定の結果が出たわ……あら、顔色が悪いわ。ちょっと、大丈夫？」

クレアの診察室で目を覚ました僕は、自分でも驚くほど汗をかき、心臓が早鐘のように鳴っていた。僕は診察室の丸椅子に、自分の膝を抱え込むようにうずくまっていた。

クレアの言う通り、ひどく青い顔をしていたんだろう。彼女は僕の手をとって、脈をはかりはじめた。

「ソファに移動しましょう。さあ、肩を貸してあげる」

「大丈夫だよ、ちよつとうたた寝をしていたら、少し夢見が悪くて

……」

「どんな夢？」

「いつもの縁起の悪い夢」

それだけ言うと、クレアは承知した。

僕は、精神が不安定な状態にあるとき、決まってあるひとつの場面を夢に見る。

クリーム色をした、田舎の一軒家。裏に池のある……。

呼吸が落ち着いてくると、クレアは真剣な表情で僕に訊ねた。

「ねえ、あなた、まさか記憶が戻ったってことはないわよね？」

「どうして？」

「違うなら……いいのよ。でももしそうなら」

血の気のうせた僕の手を握る彼女の手、力がこもった。

「友人として忠告するわ。もう一度忘れたほうがいい」

窓の外に目をやった。光がぶれてみえる。

まだ少し休んでいた方がいいだろう。

「大丈夫だよ。クレア、ほかのことを話そう。そのうちに気分がよくなると思うんだ。それに……DNA鑑定だって？」

話の前後がつながらず、僕は戸惑った。

「あなたが調べてほしいといっていた、手紙のことよ」

証拠品よろしくビニールに収納された手紙を裏返しにし、黒ずんだ染みを示す。

「これ、乾いた血液ではないかと思って検査にかけていたの。ただし古いものだし量も少ないから心配だったけど、当たりを引いたわ。この手紙の差出人は、やはりアモとミサの娘のジュリね。筆跡も一致するわ。彼女、みつかったの？」

「バルたちからは何の連絡もないよ。もし、できれば……昨日のあの部屋を君にもみせたかったよ。何故彼女が僕に手紙を送ったのか、ひと目でわかったはずだから」

「とにかく無理はしないことよ。あなたは調子が悪いわ。自分で思ってるよりずっとよ」

心配するクレアを宥め、病院の外に出た。

「ギーでもいいわ、彼は察しがいいもの。だれかと一緒にいるのよ」と最後にクレアは忠告した。

病院に来たのは、クレアが未提出の日記についてこれ以上待てないと言ってきたからだ。それは病院に呼び寄せる口実だったのかもしれない。クレアは僕のことを心配している。患者として？ そうかもしれない。だけど、それがなんだというんだろう。

僕は歩いてセブンスに向かった。ギーはまだ来ていない。

テーブル席に座り、コーヒーを注文すると、僕は暇になった。

暇になると、人の常というやつで、つい必要のない邪魔なことを考えてしまう。あの夢のことか。あれが僕の本当の記憶か、それとも、映画や犯罪テレビドラマのワン・シーンなのか……それは僕には区別がつけられない。だけどあの場面を夢にみると、僕は自分の手があの女の子の血で真っ赤になってしまったんじゃないかと、そんな恐ろしい想像をしてしまうのだ。もう一度忘れたほうがいい、と言ったクレアの言葉はただの感傷ではないような気がした。

僕は、無理矢理違うところに意識を向けることにした。

昨日、アモとミサのアパートの隠し部屋に僕たちは入っていった、そのあとのことに。細部まできちんと頭の中に組み立てていく。

その部屋がジュリを隠していた部屋であるように、僕の目にはうつった。

ギーもそうだったらしく、顔をしかめていた。

だが。その小部屋がそれだけのために作られたものかというところ、それは違つて見当もついた。その部屋の異常さは、外側から鍵をかけ、人を閉じ込められるところ、それだけではない。

本棚に並んだ大量の、嗜好性の強い本たちだ。

「こつちは僕と同じ趣味かな」というと、ギーは思いっきり顔をしかめた。

「馬鹿なことを言うもんじゃないぞ。お前の読書趣味とこいつらの別物だ」

「『連続殺人鬼の半生』、『犯罪者の心理』、『サイコパスの誕生』

。彼らは、少し変わったファンクラブに入ってみただね」

僕は一冊の本を取り出す。表紙は小部屋のところどころに掛けるあるポスターと同じ髭面の、白人の男の似顔絵だった。僕は彼についていくらか知識があった。

「少し前に流行した伝説の連続殺人鬼だね。被害者が百とも二百ともいわれてる、いわゆる人殺しのカリスマ。一度も捕まらずに四年前に姿を消してる。いまでも世界中に信者がいるんだ。悪魔崇拜み

たいなものだね」

部屋にある本は全て、彼の経歴や、犯罪について事細かに記述された過激な書籍だった。

落ちているぬいぐるみに目をやる。こういった部屋に一日中閉じ込められる経験というのは、子供にとって、どれほどのストレスになるのかは想像に難くない。

「こういう危険思想は……ミルドタウンじゃ御法度だろう」

ギーの言う通り、ミルドタウンでは、宗教ですら、あまり推奨されていない。小さな街の中で、よけいな争いを呼びこまないためだ。同時に、ありとあらゆる思想についても排除される傾向にある。だから情報が統制され、書籍類は図書館が、申請をしても審査を通ったものでなければ、手に入らない。

「物流の制限されたミルドタウンで、これだけの書籍を集めるのは難しいぞ」

「密輸だろうね」

ミルドタウンの工場で作られた製品は、街の外にも輸出されている。そのルートを使えば、こういう品を手に入れることもできるかもしれない。

さらにくわしく部屋の中を調べていて、ギーが思いがけないものをみつけた。彼は本を棚からこっそりと抜きだし、現れたものを凝視している。

「どうしたの？」

僕も同じものを見て、どうしてギーが返事もせずに固まったままなのか、正確に理解した。本棚は手作りのもので、本をどけると、壁が見えるようになっていた。その一面に、メモや写真が貼っていた。

しかも、驚くべきことに、それは僕の写真であり、住所、行動記録などのメモだったのだ。

「……僕のファンクラブと掛け持ちしてたみたいだね」

「ただのファンじゃない」

ギーが中の一枚を外し、僕の顔の横に並べて、しげしげとみつめた。

その一枚は、古いものらしく、画面が色褪せている。写真には六歳くらいの少年がうつっていた。

「これは、お前にそっくりだ」

ギーが神妙な顔つきでそう言った。

「僕も気がついたことがあるよ」

「何だ？」

僕は本棚に画鋏でとめられた、本人ではなく殺人現場のミニ・ポスターという趣味の悪いそれを外し、ギーにみせた。

「この殺人鬼は七年前、某国の地方議員の息子を惨殺した。殺害現場には彼のサインが残されていた。彼の名前はダダ。サインはDAだ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7105y/>

---

ミルドタウン

2011年11月23日20時53分発行